



＊ 針 葉 樹 會 報 ＊

通 卷 第 九 十 九 號

傾 山 に つ い て 近 藤

熊本驛を出た大分行列車が阿蘇山に上りつめてそれから波野高原をひた走りに下る時列車の窓の左側に久住連峰右側に祖母山と云ふ頗る良い景觀が展開する。此の祖母山群の左方遙か彼方に特殊な形をした山が此の傾山である。此の山へ一度是非登り度く考へて居た矢先友人より誘はれて偶然梅雨前の數日を過した時の記である。

標高は僅に一、六〇五米突ではあるが入山の足場が可成り悪いので一般の人は餘り登らぬ様である。

竹田驛で下車した吾等三名幸運にも一日一回發と云ふ尾平鑛山行のバスに乗り込んでから約一時間半奥嶽川の溪谷に沿ふてつけられた怪しげな道を強引な運轉にひや／＼しながら尾平鑛山の手前約三里の上畑に下車する。それから奥嶽川を渡つて九折迄約三十町數戸ある農家の内古川宅に泊めて貰ふ。

此の山には色々の登路がある

先づ第一が九折越を経て後傾山に上りそれから本傾に登る道是れは最も道がよい。

第二は九折から九折川を渡りナバ山小屋を経て「三ツ尾」(標高一、一六八米突)を経て南傾山に登りそれより本傾に行く道

第三、第二のナバ山小屋より右に切つて吉作坊子と二つ坊子の鞍部に出てそれから二つ坊子、三つ坊子の頂上を経て前傾に登りそれより三つ尾よりの登路に合する道

第四、九折川の本流を飽く迄上りつめると此の谷は山手谷となる。これを更につめて南傾と本峯との間に出るか、或は右折して九折越と後傾との

間に出る方法がある。

大体九折からは此四つの登路があると考へられる、出發前色々考へてナバ山小屋經由三つ尾路を上り九折越へ下る事に決めてあつた。

處が翌朝になると天候ががらりと變つて大雨である。古川氏も心配して登山を中止する様切言するので折角此處迄來たのだからナバ山小屋邊行つて見てそれから引返してくると云ふ事にして家を出たが内心はあはよくば頂上迄行かうと云ふ野心満々たるものがあり連れの二人も同じ氣持で充分仕度をして家を出た。古川氏より菅笠を借用してかぶる、これは何年振りかの姿である。嘗つて熊さんペンちゃん和秩父の旅に出た時愛用したあの笠の姿である、あれから十六、七年を経過し場所も南の九州の山で一寸感慨深いものがあつた。

九折川を渡つて右岸を進行する事約二十分さかおけぶちで逆槽淵に至る。此の淵には約五米突の瀧が懸つて居る。それより左折して山腹を捲いて上る一尾根越すと「ドウカイ谷」の本流に出會ふ。此處に約五十米突の大瀑布がある。觀音瀧と云ふそうである。實に大きい瀧である、それより前の尾根に引返して尾根を上るに鑛山小屋があり一服して「ドーカイ本谷」を渡り椎茸の出来る腐れ木の間を見當をつけて上る此の邊り踏み跡もない。ナバ山小屋の一寸手前から又踏み跡らしいものがあり小屋に至る、此の小屋はすつかり荒れ果て、一寸恐ろしい感じである。雨はザヤン／＼降るしそれに道端には處々廢坑（シキと土地では云ふ）があつて冷たい風が眞暗な奥の方から吹き出て今にも何にか奥から飛出して來そうな

氣配がする。

それに此のナバ山小屋附近の「シキ」でお化けに會つた紀行文を大牟田で讀んで來て居るので晝間とは云へ何んとも云へない怪氣が到る處に漂つて居る、餘り氣持のよい登山路ではない。三人とも今は全く濡れ鼠となつて（汗の方で濡れた部分が多い）三つ尾目指して一生懸命登る、午前八時九折發、三つ尾頂上午前十一時である、三角點を探したが何處にも見當らない。

是れより道は大白谷側を捲いて悠々と下り始める、餘り下るの道の間達えたのではないかと心配しながらそれでも途中注意深く歩いて居るので大抵大丈夫と確信して進む。

丁度〇時頃になると道は急に登り出して約二百米突程我ん張ると前傾への分岐點へ出る。

此の本尾根に出ると今迄の雨は更に風も加はつて物凄、頭の笠が下から吹きあげる風の爲めに頭から離れそうになる、三十分程行くと突然道が二つに分れ右に一寸行つて見るといきなり約五十米突位ある巖頭に立つて居る事が分つた。猛烈な風と細雨で足元が危い事甚だしい。

突然、全く突然、目の前の斷崖を距て、一大巖頭が見えた、是れが本領山である事が分つた、それより約十分で本峰上に立つ。餘り風雨が強いので元來の道を引返そうと考へたが九折越からの道が本道であるので思ひ切つて豫定通り進む事にした。

本峰より一寸急傾斜を下り後傾山に再び上る、此の邊は氣をつけないと道に迷ふ心配がある、後傾山からの下りは實に急で小さい木の幹につかまつて約三四十米突下る、下りきると急に廣い尾

根が下に擴がつて九折越迄ただ下るばかりであるが最近登山者が無い爲め切り開きもしてないし雜木雜草の中を押し分けて進む、雨は依然としてザン／＼降り、体の表面は一寸平方も乾いた處がないと云ふ感じである。

それでも九折越に着いた時は雨の峠路を「是れは實によい峠だね」なんて嬉しい氣持でビシヤ／＼の草に腰をおろして休んだが汗が引くと急に寒くなつて來たので大急ぎで峠路を下りひた下りに下つて午後四時無事九折村に着いた。

今日は全く、初めから終り迄完全に降られてしまつたが豫定通り迷ひもせず登れたので三人とも頗る上機嫌である。

家の庭から見上げると今日上つて行つた山々が段々雨雲の中から出て來て全くの大觀の畫である。此の庭から、見た傾諸峰は文字通り傾いて見える、頭の上から押しかぶさつて來る様な感じがする、更に一泊を請ふて歸つた。

最後に感じた事は九折川は全く笛吹川の上流と同じ感じがした事である、水は飽く迄多く清くそして瀧が多い。それを包む樹林は鬱蒼として茂り落葉は道を埋めつくして心良い感觸を足へ傳へる處なんか全く秩父的である。

森脇芳之君より

東京出發の際は御見送り頂きまして誠に有難う御座いました。御承知の如く三月一日私達は一齊に今此處 Java に上陸、旬日ならずして敵の全面降伏を見る事が出來ました。今小生は Java で

は唯一つ残された土人の王様の居るソロシマクシヤに居りまず。此處はアラビヤナイトの國の如く土人の王様が支配し家來は皆日本の封建時代の如く金色の刀を腰に毎日登城してゐます。

王様さも會ひましたし、宮庭の踊も見ました。一般に戦争が短期間だつたのと、土民の抗戰意識が無かつたのとで、とても戦争後一ヶ月餘りとは思へない状態です。町は平和で今迄英米から自由に物資が入つてゐたので、誰かの好きなジョニーカー、キングジョージが幾らでも手に入ります。一般に思つた程暑くなく、むしろ朝夕は裸である風邪を引きます。風景は日本の風景に近く、嬉しい事には三、〇〇〇米級の山が十數あります。山登りは此處では餘り行はれて居ない様ですが、山の中腹迄坦々たる自動車路が走り豪莊な別莊地帯が二、〇〇〇米から二、五〇〇米の山の中にあります。今マレー語を覚えてゐます。少しは話せる様に成りました。爲念一寸御紹介申し上げますと、

山	グノン
家守	チチャ
山に登る	ナイグノン
山を降る	ツールングノン
麓	カキグノン
丘	ブキ
峠	グンティン
谷	ルンバ
太陽	マタハト

まだありますが熊とか狸といふ言葉は又の機會を致します。で

は皆々様御大事に。又 Jape の山でも登つたら紀行文を出しますから。

(昭和十七年四月十四日)

於 Batavia)

記 録

三頭山 (五月十七日)

中川孫一外一名

小河内ダムの視察を兼ねて宿志を果した、東京市水道水源地の山と暮すこと二十五年いふ水道局の川鍋技手(田島さんの山行事によく出てくるK青年)が案内してくれたので山中の一木一徑同氏の手鹽にかゝらぬものなく正に大名登山だつた。三角點は白樺を交へた雑木林の中にあり、一般登山道は其南側を巻いて相武國境の見晴臺に達して居るから、ハイカーに荒されてゐないのが嬉しい。生憎十時頃から霧がまいてきて眺望は全く利かなかつた。静かない山である。早春の頃がい、だらう。

劔・仙人谷・黒部(八月六日—十二日)中川、堀岡、宿望の劔だ。

八日・九日と物凄い豪雨に劔澤籠城を餘儀なくされたが、十日は晴れ上つたので勇躍長次郎から八つ峯五、六峯間のキレットに登り、八つ峯上半—五尾根—五峯—別山尾根を一氣に片附けた。案内もザイルもなく唯二人で八つ峯をやつたといふことは所謂「八つ峯」の常識外れらしく、急に大家に祭り上げられて弱つた。仙人谷はさすがに黒部の支流らしい相貌を傳へてゐる立派な谷だ。

仙人谷かの下流の黒部は歩道に代る隧道開通によつて所謂黒部の

溪觀は全滅(闇を行くから)である。勿論仙人谷上流の溯行も不可能だ。もはや十字峽を窺ふ方法はない(記事参照)

小川谷から大久保谷へ(九月十三日)中川、外三名

日原川の支流小谷川を溯つて天目山に取つき秩父側へ降る此計畫は美事當つた。小川谷の縁はすばらしい。源流西谷澤には二、三人泊れる立派な山葵小屋がある。この邊から涸澤になつて約一時間の後國境尾根に出る。日原から高距九〇〇米だが終始登らしい登りが無いうちに來てしまふ。大久保谷は坊主山から北東に張出した長大な尾根につけられた明瞭な林道を下るのだが棧道の大部分は腐朽し危険極まりない。しかも非常な高廻りで河身は全然見えない。ミカワで一旦河床を渉るが、それから又高廻りになり立派な林道に導かれて浦山川沿ひに秩父鐵道浦山口まで來てしまふ。相當な瀑布を數ヶ所にかけてゐる此谷は下流から河身通しと高巻きとで溯らねば其價值が判らない。

◎針葉樹會報は愈々次號を以て第百號を迎へる事になりました。昭和五年以來會員一同の思ふ事なす事をよく記録に留めて、今其の第壹卷第壹號の謄寫版刷りを開いてみても相變らずの會の氣分が溢れてゐるのに驚きます。編輯子百號にのみ氣をとられて居りました處、九十九號の原稿が集らず、大へんに遅れまして申譯なく存じます。續いて百號を出したい考へで居ますが、これ又原稿なく如何とも致し方なく困つて居ります。諸兄振つて御寄書下され度御頼み申します。第百號記念にアルバム代りに針葉樹會員の家族名鑑を作つて居ます。此の方は九分通り原稿が集つて居ます。返信未發送の諸兄は至急御送り下さい。